

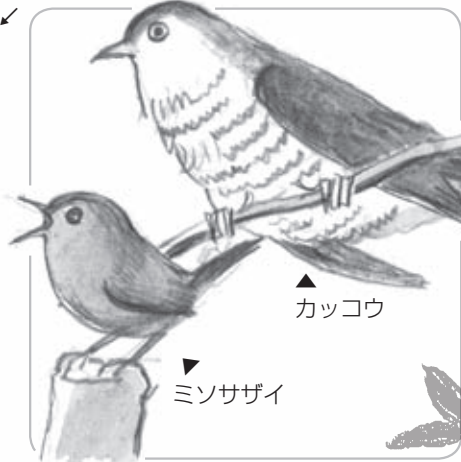
扇や通信 '15初夏号

安達太良高原の初夏は、鳥たちの饗宴の季節です。長い冬の間、静まり返っていた森や野原に、山桜や、こぶし、かたくり、つつじ、山吹、すみれなどの花が咲き競う春が行くと、変わって木々の若葉がいつせいに顔を出し、何十色もの緑色のパステルを塗り分けたような様々な色の美しい緑が高原を包みます。そして、夜明けから日暮れまで、いいえ、夜までも、いろいろな種類の沢山の鳥たちが歌い続けるのです。

そんな高原の、いのちが輝くような季節、ミソサザイとカッコウ話をいたしましょう。

「ミソサザイ」といつ鳥をごぞんじですか？なんといつてもチビさんで、体の大きさが十センチばかりー大人の手のひらにすっぽりつつまめるほどです。ミソサザイは、よく茂った森や溪流の近くが好きで、木々の間やヤブを風のように飛びぬけます。体の色は、地味な茶色ですが、体をふるわせて、ジリジリジリジリと鳴くその歌声は、音程が高く、とてもよく通るので、遠くにおいても、そのおチビさんがいることがわかります。

カッコウは、春もたけなわの頃になると、明るい林や高原にやって来ます。体の色は、グレイですが、のどからお腹は白地に黒の縞模様が入っているのにお気づきの方も多いでしょう。(ツツドリもカッコウとよく似ていますが、黒の縞々が太めで、ポポポ、ポポポと鳴きます。そしてホトトギスもよく似ていますが、黒の縞がもっと太く、キョキョキョキョ、キョキョと鳴きます。安達太良高原で、灰色の体に白と黒の縞々のお腹の鳥を見かけたら、よおくんらへんください。)



▲カッコウ

▼ミソサザイ

カッコウは、鳴く時には翼をたたら、よおくんらへんください。()

ミソサザイとカッコウのお話

し、尾をピンと上げて、それからあの陽気な声をふりまきます。カッコウ、カッコウ、カッカッコウという歌声は、のどかな初夏をいつそのどかにしてくれませぬ。

「かたくり荘」のミソサザイ

ちよっと昔、温泉町に「かたくり荘」という宿屋がありました。

七才になったばかりのユキコはその宿のひとり娘でした。温泉まちには、ちよつどユキコの遊び相手になる年頃の子供がなく、ユキコは、かたくり荘

高い声がよく通り、おしゃべりも大好きなので、誰からともなく「ユキコはミソサザイだ」と言い出して、家族も町の人たちも、ミソサザイの「ツリリリリ」という鳴き声から、ユキコを「ツリリ」と呼ぶようになりました。その「あだ名」を知った、常連客の詩人や画家も、遠くから響いてくるミソサザイの声を聴きながら、「なるほど、ツリリとはよく付けたもんだ。可愛い名前だねえ。きみにぴったりだ」とユキコの頭をなでて笑うのでした。

ユキコはちよつと気を悪くするものの、沢で元気に鳴いているミソサザイに出会うと、なんだか自分の姿を見ているようで、ミソサザイが自分のきょうだいのような気もするのです。

の女将をつとめる母親の後尻をくっついて宿の中を歩き回ったり、天気の良い日は森に遊びに行ったり、長逗留する客の詩人や画家を、ユキコだけが知っている森の道や霧の湧く沢や、花の群生地に「あんない」したりして過ごしていました。

そんなユキコは、オチビさんで、その春、分教場の一年生になったばかりでしたが、ユキコの登校姿を見る町の人たちは、「ランドセルが歩いている」といっほどでした。体は小さくとも、ユキコはいつも元気いっばいで、かん

さて、ある日、かたくり荘の木賃宿に、三味線を抱えた女のひととその娘らしい子どもがやって来ました。荷物はそれぞれにふるしき包み一つ持ったまま、ひと月の間、泊まらせてほしいといひます。

女の人は目が見えず、あちこちの温泉町をめぐって三味線を弾いているそうです。ユキコは、その女の子を一目見るなりすっかりうれしくなりました。その子は、こぶしの花のように白い肌、大きな黒いひとみ、長いまつ毛、山桜のつぼみのような愛らしくくちびるの、うつくしい子でした。「絵本で見たお姫さまだー」とユキコは心の中で叫びました。その子の体はユキ

コより一回り大きくて、口のききかたもすっかりしているけれど、聞けば歳もおんなじ七才ー母娘が泊まっているひと月の間は、遊び相手ができたのです。女の子はカツコといいました。

カツコも一年生ですが、母子は、温泉にやってくる前に、よその町にいたので、その小学校に入学したばかりで、転校です。「せっかく友だちで来たって、母ちゃんがまた別の温泉にいけば、わたしもいっしょだから、行ったこの学校に移るんだ。しかないさ」とカツコは大人びた口調でためいきをつきました。

ふたりは仲良く学校に通いましたが、教室にいる間、カツコはうつむいたまますごしていました。でも、宿に帰ると、七才の子どもになって、ユキコと一緒におはじきやお手玉をしたり、森を探検したりして、時を惜しむかのように、遊びました。

そして夕方、温泉町に灯がともると、カツコは三味線を持った母親の手を引いて、一緒に仕事に出かけていきました。ユキコは、学校が終わって、カツコが夕方出かけるまでの間、いっしょに遊べるのがうれしくて、温泉町の灯がともらなければいいのにーと思うのでした。

ツリリとカツコ

ある時、カツコがたずねました。「なんでみんなは、ユキコちゃんのこと、ツリリって言うの？」ユキコがわけ

を話すと、カツコは首をかしげて「ミソザイって、どんな鳥？」とたずねます。「んじゃ、今度、ミソザイ見にいぐべー」二人はいそいそと森の沢へりに行って、息をひそめて小鳥を待ちました。

するとまもなくミソザイが飛んできて、ちゃんと木の小枝に止まると、ツリリリリ、ツリリリリリと、体をふるわせながら力いっぱい歌います。その声の大きいこと、森中に



響いて、向こうの宿まで聞こえていきそうです。

ユキコの声もかん高くて大きくて、ユキコがはしゃいでいたりする時の声は、ずいぶん遠くまで響いていって、温泉町の人たちは、「ああ、今日はユキコちゃんがさわいでるな」と笑いあっていたほほです。

「ほんとだ、ユキコちゃんとおんなじだあー」といって、カツコは大笑いしました。ミソザイはその声にびびりして飛び去っていきましたが、そ

の小さな姿がまた、ユキコにそっくりだと、カツコは笑いこぼるのです。カツコがかたくり荘に来て十日余りたっていました。「こんな笑顔を見るのは初めてだな」とユキコはそれがうれしくて、一緒に笑いました。

その帰り道、カツコがいました。「んじゃ、わたしはなんの鳥だべー」うん、あんたは、カツコだからカツコだよ。カツコウはミソザイよりずっと大きいし、うるさくないし、あんたはぜったいカツコウだ「ユキコはいいました。

次の朝、学校に行く山道の木の上で、カツコウが鳴いていました。

「わたし、カツコウ見るのも初めてだよ」カツコは立ち止まってしばらくカツコウを見上げていました。「お腹にしましまの模様があるんだねえ、おしゃれさんだね」とほほ笑みながら、カツコが、ぼつんといいました。

「カツコウはいいな。あかるい空とか森の上を好きなように飛んだり、歌ったりできるもん。夜の町に行かないでいいもん。わたし、カツコウだったらよかった」ユキコは黙ってカツコと手をつないで、それからいきました。「わたし、今度からあんたのこと、カツコって呼ぶ。カツコウのカツコだよ」カツコは笑顔でうなずきました。その日から二人は「ツリリ」「カツコ」と呼び合うようになりました。

それからというものが、カツコウが鳴いていると、ユキコが「ほら、あんた

のこと呼んでるよ、返事しな」。ミソザイの声が聞こえてくると「ほら、あんたのこと呼んでるよ」と二人はいい合い「カツコウ、カツコウ」という声にカツコは「はいはい、はいはい」と答え、「ツリリリリ、ツリリリリ」とミソザイの声が響いてくると「はいはい、はい」とユキコが応えては、二人でお腹を抱えて笑いあいました。

ある日、温泉のふもとの大きな町で、神社の祭りがありました。ユキコは、カタクリ荘に泊まっている詩人につれられて、祭りにでかけました。神社の境内には夜店がいっぱい並び、沢山の人々がひしめいて、それはそれはにぎやかでした。ユキコは人ごみの波におぼれそうになりながら歩いていますが、境内の方から聞こえてくる三味線の音に気がつきました。人波が輪になった真ん中で、何かやっています。むりやり割り込んでみると、そこではカツコの母親が三味線を弾き、脇で女の子が踊っています。

女の子は、赤いきものを着て、花の付いた笠を深くかぶり、鼻にお白粉を付け、唇に紅をさして大人びて見えますが、その体つきや動きは、まぎれもなくカツコです。

三味線と踊りが終わると、カツコは小さなお椀を持って、お金を集めて回ります。お金を出す人はわずかでしたが、カツコがほほ笑みながら丁寧におじぎをして、お椀を差し出し続けている

ました。

ユキコはひとり、人ごみを飛び出し、神社の裏に走って行って、大きな杉の木の下で思い切り泣きました。「カッコ、たいへんだね、がんばるんだね」と心の中でいいながら。

ユキコといっしょに、母娘の姿を見ていた詩人は、「だれにでも、運命」というものがあるんだよ。しかたがない……とユキコの肩を抱いていいました。「でもね、運命は自分の力で変えることもできるんだよ。あの子はきっとできる……うんめいって何?」「大人になったらわかるさ。もう泣くな」詩人に手を引かれて、ユキコは泣きじゃくりながら家に帰りました。

「ちよつとはべれて、目がこんなに腫れるほど泣くななんて、まくだまだこともなんだねえ」という母親の胸に顔を埋めて、ユキコは、夜遅くまで踊り続けるだろうカッコを思いました。

祭りの次の朝、ユキコとカッコは、何事もなかったように学校に行き、放課後はいつものように遊びました。

でも、宿の屋根の上でカッコウがカッコを呼んでいても、沢からミソサザイがユキコを誘っていても、二人とも返事をしないのは、別れの日が近づいてきたせいです。

カッコの旅立ち

明日は、母娘が旅立つという日、ユキコは、カッコに贈り物をしました。東京に住んでいる叔母さんが、ユキコ

の入学祝いに百貨店で選んだとい、ワンピースです。かわいくふくらんだ袖にギャザーが入ったスカート、白地にやわらかな黒い縞模様の入った柄の、いかにも都会的な服で、ユキコは小躍りして喜んだものの、おチびさんにはブカブカでした。「三年生ぐらいになったら着られるんじゃないの」とまわり



にいわれるのもくやしくて、しまいこんでおくのもまたくやしくて、ずっと自分の部屋に飾っていたのです。

「えっ、これもうっていいのぉ?」カッコは大喜びで、何度も服を胸に当てて鏡をのぞき込みました。田舎では見たこともないモダンな服は、きれいなユキコにぴったりです。「とっても似合ってる。お嬢様みたいだよ」というユキコに、カッコはかがやくような笑顔で、そばにいる母親に「かあちゃん、お嬢様みたいな洋服だよ。白に、黒いしましまもよつで、東京から来た服だよ」というと、母親はそっと服を

なでて、「よかったね」とほほ笑み、見えない目でユキコに向かって、頭を下げました。

いよいよ、母娘が旅立つ朝のこと。帳場の方が騒がしいので、ユキコが行ってみると、番頭さんが、険しい顔で腕組みしていました。宿賃を支払う段になって、カッコの母親にその分のお金がなく、有り金をはたいても半分

がやっとならぬことでした。深くうなだれて立ち尽くすばかりの母娘に、騒ぎを聞きつけて帳場にきた宿の主人と女将がいました。「仕方ないべ。娘もひと月、仲良くしてもらって、しあわせそうだったし、またのご縁もあることだべ。なあ」と主人がかたわらの女将にいうと、女将も「そうだねえ、あんなにうれしそうだったユキコを見たことなかったよ」とうなずきました。母娘はぼろぼろ涙をこぼして、ただ何度もお辞儀をするばかりでした。

「ちよつと待って」と奥にかけこんだ女将は、ふところからお金の紙包みを取り出すと、「少しだけど、役に立てて」とカッコの母親の手ににぎらせました。

ユキコは、カッコの靴を下駄箱から探し出して、玄関のたたきにきちんとそろえてあげました。この宿に来た時のままのズック靴は、ひと月でもっと古びて、泥だらけでしたが、そんな靴でも、ユキコは、ちよつと外また歩きのカッコのために、少しだけ逆八の字に並べてあげました。

カッコは黙って上がりかまちに腰を下ろすと、ゆっくり、その靴をはいて、くるりとふりかえると、ユキコの眼をまっすぐみつめて、そうして宿を出て行きました。

その日は朝霧がとりわけ深く、母娘の後姿は、またたくまに霧の奥に消えていきました。

それから一年がたち、また春が巡ってきた頃、カッコからハガキが届きました。

「カッコはげんきです。ツリリもげんきですか」——とそれだけ書いてあって、住所はありません。女将にそれを見せると、「消印が新潟だよ。今、あの人たちは、岳からずうっと遠い所を歩いているんだねえ」と小さなため息をつきました。

それからまた一年がたち、三年目の春がきましたが、カッコからは何のたよりもありませんでした。

そんなある日、宿に芝居の一座が泊まりに来ました。たった五、六人で北の町々を回り、温泉宿では宴会場で、ちよつとした芝居や歌や踊りをする一座です。

その座長という女の人が、ユキコを見ていいました。「あんたがツリリちゃんていうのかい?」「ユキコ」がびっくりしている、「そうかい、会えてよかったです」と、ユキコの髪をなでました。「カッコちゃんはねえ、うちの一座の花形だったんだよ。踊りの筋がよく

て、なんといつても、あの子には華があった…。しっかりと親思いだっ
だ…」

カツコと母親は、二年前からその一
座に加わって、日本海の岸辺の町を巡
業していましたが、カツコの母親が体
をこわしたために、母娘でどこかの故
郷に帰っていったそうです。

「岳温泉の『かたくり荘』という宿
にいた時が、一番楽しかった、とよく
あの子は言っていた。ツリリとい
う友だちがいたんだよ、その子、ミン
サザイなんだ、なんて、わけのわから
ないことをいって、楽しそうに笑って
いたよ。ほんとにきれいな子でね、旅
の一座の花形で終わるような子じゃな
かった。惜しいねえ」と女の人はため
息をつきながら「せつかく、ここまで
巡業に来んだからせめて、あの子がよ
く語っていた『かたくり荘』に世話に
なるうと思つてね」

それからまた時が過ぎ、ユキコは二
十才になりました。ふもとの町から、
働き者のおむこさんを迎えて、かたく
り荘を継ぎ、若女将になってがんばっ
ていました。ユキコが小さかった頃の
お客さんも、年を取っても変わらずに
泊まりにきてくれて、宿は昔のままに
繁盛していました。

ある時、ユキコが小さい時に、祭り
につれていってもらった詩人が東京か
ら長逗留にやってくるなり、旅行かば
んから一冊の雑誌を取り出してユキコ

に見せました。「ねえ、これ、あの時
のカツコちゃんじゃあないかなあ」と、
広げたページには、きれいな女優さん
の写真が載っていました。「新進女優
五月香津子だつて。この顔立ち、ど
う見てもカツコちゃんだよ」

そういえば、大きな瞳や花びらのよ
うなくちびる、卵形の顔は、カツコに
ちがいないような気がします。ユキコ



は、その雑誌の出版元あてに手紙を出
して、五月香津子の住所をたずねま
したが、何度たのんでも返事はありませ
んでした。それからというもの、ユキ
コは、詩人が持つてきてくれた雑誌を
毎月取り寄せては、丹念にページをめ
くって、その女優を探しましたが、五
月香津子の記事は見当たりません。ふ
もとの町に映画がかかると、その度
に見に行きましたが、カツコらしいその
女優さんの姿は、見つけることができ
ませんでした。―それでもユキコの心
は満たされていました。だって、カツ
コは、温泉町や、旅の一座で流れてい
くくらしから、きつと自分の力で抜け

出したのでしょうから。

カツコウが来て鳴く季節のたびに、
カツコが「ツリリ、わたしもがんば
てるからね」と告げている気がしてな
らないユキコでした。

そしてまた、長い長い時がたち、ユ
キコは八十を越えて、かたくり荘はユ
キコの孫の代になりました。ユキコの
髪は銀色になり、背中もまあるくなっ
て、いちだんとオチビさんになりまし
たが、かん高くてよく通る声は昔のま
まです。そんなユキコが一番の楽しみ
は、近くの森に行つて、ミンサザイと
カツコウが歌いあう声に耳を傾けるこ
とでした。

ある朝、ユキコがいつものように森
に出かけようと戸口に行くと、いつも
は下駄箱にしまっておく山歩き用の靴
が、たたきにそろえて置いてあります。
しかも、この頃、足が弱つてつまづき
やすいユキコのために、左右の靴の間
を少し離してあります。宿中、忙しく
働いているのに、こんなことをしてく
れる者がいるわけがない―不思議に思
いながら、ユキコがふと気がつく、と、
宿の前の大きな桐の木の上から、ク
ルウ、クルルウ」と鳥の小さな鳴き声
がします。見上げると、カツコウが一
羽、止っていました。ユキコが出てく
るのを待っていたかのように、カツコ
ウは大きく胸をふくらませると、「カツ
コウ、カツコウ、カツカツコウ」と歌
います。白地に黒の縞模様のおしゃれ

な胸を張つて、その鳥は鳴き続けまし
た。

「あれ、カツコウが玄関の前に来る
なんて、珍しいねえ」番頭さんが出て
きていました。「うん。私に会いに
きたんだよ」―首をかき上げる番頭さん
の背中をポンとたたいて、ユキコは
カツコウにほほ笑みかけました。

「カツコ、ツリリはこんなに元気に
してるよ。カツコも、ひろく空を思
いっきり飛んでね」と心の中でいいな
がら―。

温泉町も時の流れの中で変わり、「か
たくり荘」はいま、どこにあるのかわ
かりませんが、あだたら高原に響いて
くるカツコウとミンサザイの歌は、今
も変わらず、緑の風にのってきこえて
きます。

岳温泉 野の花一輪香る宿

政府登録旅館



福島県二本松市岳温泉1-3
TEL.0243(24)2001 FAX.0243(24)2004

扇やペア宿泊券
をどうぞ

●大切な方、親しい方へのあったかいプレ
ゼントに、扇やのペア宿泊券(お2人で
ご1泊3万円)はいかがでしょう。